

## 第1章 ウイグル医学の発展とウイグル民族のアイデンティティ ①

### 医学と民族的アイデンティティ

ウイグルでは、世界のあらゆる地域と同じように、西洋医学が優勢である。だが、近年、伝統医学であるウイグル医学が、ウイグル民族の文化として再発見されている。漢民族が様々なレベルで優越している新疆ウイグル自治区で、ウイグル医学はウイグル人が独占している医療分野である。

圧倒的な中国政府と漢文化の力により、教育や経済、政治においてウイグル人は不平等を強いられている。このような状況において、ウイグル医学はイスラムと同じように彼らの文化的アイデンティティの中核となる可能性がある。同じような伝統医学である中医学が中華民国の時代、西洋医学の流入とともに、制度的医療からはずされ、衰退しそうになった。現代では、中医学はやはり西洋医学に押されている。しかし伝統的な中国文化として、政府の援助を受け、また代替医療の復興もあって、制度的医療として西洋医学と並立している。

ウイグル医学も、少数民族医学として中国政府の援助を受け、発展している。それは、市場経済の影響、それに伴う医療改革（特に医療保険）、また、世界的に広がる伝統的医療の再興、それは統合医療、代替医療、として注目されている。西洋医学の限界と問題の影響もある。そのような中で、政府が進める西洋医学に比して、伝統医療としてのウイグル医学が制度的医療として確立していけるかどうかは、ウイグル民族のアイデンティティの大きな問題であろう。これが本章のテーマである。

本章は中国・新疆ウイグル自治区の南に位置するホータンにおける文化人類学的フィールドワークが基になっている。現地に関するデータはほとんどがインタビューによるものである。本章ではまず、ホータンにおけるウイグル医学の歴史と現状を述べる。さらに西洋医学が中央による支配とともに流入し、行政単位で病院、診療所が設立された。社会医学として保健活動はすべて西洋医学が行った。文化大革命の時期、ウイグル医学は開業も禁止され、衰退した。現在では、民族医学としてウイグル医学も発展しつつあるが、西洋医学による実験や証拠の裏づけのないのは科学的医学ではないと批判されている。その批判に答えるべく、西洋医学的な正当化に傾いている。それはウイグル医学の独自性を失う危険性をはらんでいる。

フーコー (Michel Foucault) は十八世紀以降ヨーロッパ諸国において、国家衛

生管理や予防医学を含む近代医療が、重要な役割を担うようになっていく。人口は自然なものではなく出生率、病気発生率、死亡率という法則性から考えられた。個人の病気ではなく、人口に対する病気が管理され、国家衛生管理などが行われるようになり、近代医療の普及は、国家の「バイオパワー」(bio-power)の行使に関係するようになったのである。

新疆における近代医療の普及はかなり遅れていた。いまでも、十分とはいえない。さらに、南新疆はかなり低いというように、内部格差も明確である。医療自体は中立であり、だれもが医療は良いものだと思える。しかし、それが社会の中で実施された時点で、政治的、経済的、文化的問題を帯びる。集団に対するコントロール手段となり、まさに「権力」を帯びて、格差を作り、人に意識させないやりかたで、考え方、行動に影響を与える。近代医療は集団間のさまざまな問題にかかわり、ある場合はそれを複雑化させる。新疆の場合には当然、民族対立の問題に深く関係する。

医療や保健の問題は中国成立以来、かなり改善されてきた。平均寿命は一九九九年において、新疆は六九・一歳であり、中国全体の七〇・四歳より低い。しかし、新疆にありながら新疆生産建設兵団は七五・六歳である。ウイグル人に限定すると六三歳だといわれている。幼児死亡率も中国平均より高い、ウイグル人は新疆の漢人より高い。公衆衛生の政策はある程度成功してきたが、民族間の格差は存在している。(3)

一九九〇年代の新疆政府のヘルスケアの予算は全予算の九%といわれている。しかし、医療が民族間で平等に届くことはない。医院 病院ではなく中国式に医院という用語を使う、入院施設を持たないのは診療所である)などの施設は漢人が住むところに集中している。また、ヘルスケアにかかわる人員、医院の医者などは漢人が多く、ウイグル語などあまり話すことができない。また、ここ数年で、民間の病院が増大しているが、法外な料金を要求する医院、検査ばかりして、効果的な治療をしない病院もある。中国政府によって普及された近代医学は、伝染病対策と集団保健を目的として成長してきたわけであるから、その政治性は明確である。民族問題において、今でも緊張関係にあるウイグル民族と中国政府との歴史的関係を考え、中国政府がサポートする近代医学のウイグル自治区への普及の過程を見ると、それは、ウイグル社会と文化のアイデンティティの問題に触れてくる。

ウイグル医学の歴史はあまりわかっていない。だが、長年にわたって、ウイグル人の医療の核になってきたことだけは確かである。制度的医療として認められたあとも、中国政府がサポートする近代医学とは格段の差がある。ウイグル医学の中心であるホータンでも、西洋医学の総合病院は十一、ベッド数は一八五六、人員は一九九四人であり、ウイグル医学は病院八、ベッド数三七〇、人員は三九三である。統計で把握されるのは公的な医療機関のみである(4)

ウイグル医学でも民間の病院が、ここ数年でかなり増加している。それは統計にあがってこないから把握しにくいだが、入院設備を持ち、多くのスタッフを抱える医院、ウイグル医学校で教えた後、退職して個人の医院を開いた人、学校を卒業して、自宅を改造して診療を行っている人、政府にかかわると面倒だからという理由で、診療所の看板を出してない。自宅を少し改造して診療を行っている。それでもロコミで人が集まる)など多様である。

次から、ウイグル医学の歴史と現状を述べ、開業しているウイグル医の事例を紹介する。たしかに、ウイグル人の医療に対する要求に答えるかのように、個人の病院が急激に増えている。しかし、ウイグル医学の理論や効果の検証が西洋近代医学によって行われている。従来からの年配の医者は西洋医学との結合を必要ないとして、とにかく臨床を重要視するが、若手の医者は西洋医学の成果を取り入れることが重要だと考えている。さらに、ウイグル医学が発展することで、漢民族との医療面での離反はかなり明白になってきている。

### ウイグル医学の歴史と現状

ウイグル医学は、紀元前五世紀のギリシャ医学から始まり、十二世紀にかけてアラブ地域で発展したユナニ医学（イスラム医学）が、ウイグルに伝わったものといわれていた。しかし、最近ではイスラムとのつながりはあまり強調されない。そのかわり、二五〇〇年前から、ウイグル医学はタクラマカンの地域に存在することがしきりにいわれている。これも民族主義的な動きであろう。二五〇〇年前というと、ギリシャ医学のヒポクラテスの時代である。ユナニ医学はギリシャ医学やインドの医学が、アラブ地域の民俗医学と混合したものであり、ヨーロッパでは近代医学の出現まで使われた。当のアラブ地域では植民地とともに流れ込んだ西洋医学に押され、今では制度としては残っていない。インド、パキスタン、イランなどの伝統医学との類似性が強い。

西洋医学が新疆に本格的に導入されるのは、中華人民共和国になってからであり、それまでは民間のウイグル医が医療を担っていた。『ロプ県誌』 ホータンの東隣の県)

⑤で簡単なウイグル医学の近代の歴史を見てみると、二八八〇年代にはロプ県には新疆全土で有名なウイグル医学の医者、トフティ・アホン・アジがいた。ほかに民間のウイグル医がいて、医療保健、防疫の仕事をしていた。一九五四年、人民政府の組織に入り、医療の総合管理を担い、一九五六年には、ロプ県ウイグル医連合診療部が設立され、八名の医師がいた。収入は各自に分配する管理方法をとっていた。一九六〇年にはロプ鎮衛生院と合併した。文化大革命のとき、人員は下放か、配置転換させられた。一九七八年には診療所部は閉鎖された。一九八八年には県人民政府と自治区衛生庁の支持の下で県のウイグル病院が建設された。各郷は二万円を寄付し、銀行から三万円を無利息で借り入れ、薬剤、医療器具を整えた。一九九四年には医師二名、医士 専門学校卒の医者) 四名、薬剤師二名、看護士一名、ほかの職員二二名になっている。ベッド数二〇、毎日四〇―五〇人の人が訪れた。」

カシユガルに近い 𐰽𐰺𐰽𐰾 (ポスカム) 県誌』⑥によると、二九四七年以前には公的な医療衛生機関はなにもなく、民間の診療所もなかった。他に、五人ほどの医療がわかる宗教人士がバザールの一角にいた。民間の薬を使って治療していたが、診察する人は少ない。病気になるた大部分の人は、シャーマンのような人に悪霊、鬼を祓ってもらうか、鷹を跳ばせて邪気を祓っていた。ウイグル医は中華人民共和国以前には五名ほどいた、五〇―六〇年代は移動して診療していた。七九年に診療所ができ、八五年には県のウイグル病院が設立された。」

ホータンに関しては『ホータン風物』⑦の中に次のような記述がある。ウイグル医学は二〇〇〇余年の歴史がある。『回回医学文献』 『回回薬方三十六卷』など有名な文献もある。インド、パキスタン、イラン、古代ギリシャの医学を吸収して発展してきた。一九五六年に新疆のウイグル衛生工作者協会とウイグル民族診療所がホータンにできた。これがホータン地区ウイグル病院になった。このほか診療所、薬屋が三〇〇ある。以後、七つの県にウイグル病院が設立された。

いまでは、ウイグル医学専門学校、付属病院などが建てられ、医療制度としても認められている。プライマリーヘルスケアとして、また、心臓病など西洋医学の効果が薄い慢性病などの治療効果が注目されている。ホータン地区ウイグル病院は一九七五年に設立され、一九九二年に新疆ウイグル医学高等专科学校が設立されてからは、そ

の付属医院となっている。ウイグル医学の医者と専門職員は二五七人、看護師は一人いる。外来、入院のほか教育、研究、製剤を行っている。ベッド数一五〇、年間三万五〇〇〇人の患者が訪れる。

ウイグル医学高等専科学校は一学年四〇〇人、教師は七〇名、ウイグル医学、薬学、看護士養成などのコースがある。全学で一七六〇人の学生、学生の九〇％はウイグル人、あとはカザフ人などである。漢人は一人もいない。年間三八〇〇元が授業料、宿舍も含めたら四五〇〇元である。六〇％の患者はほかの県からくる。新疆自治区の医科系大学のランクでは新疆医科大学が一番、ここは二番目である。直属医院が隣接してたてられ、臨床の授業などを行っている。

### 近代医学によるウイグル医学の正当化

改革開放とともに、ウイグル医学も急激な発展を見せている。新疆には四〇のウイグル医院が建てられている。その中の一つは自治区の基準に達し、六は地区の基準、三三は市や郷の基準を満たしている。二七〇〇人の医者、医療技術者が働き、一九八〇のベッド数があり、ウイグル医学の学校も設立され、尋常性白斑などの皮膚病、心臓血管病、脳疾患などに治療の効果を上げている。

この発展を証明するように、二〇〇三年にウルムチで国際ウイグル医薬学術会議が開催された。ヨーロッパ、ロシア、インド、パキスタン、日本から多くの人が集まり、自治区の主席の挨拶で盛大に開催された。その中で約三〇〇の発表がなされた。文献研究など歴史的な研究はごくわずかで、大半は基礎理論、臨床研究、薬物研究であった。ウイグル医学の進歩と現代化をめざしているのだから、当然かもしれないが、ウイグル医学の伝統に沿った理論の確立というより、大半が近代医学の理論や検証方法を使った発表であった。ウイグル医学の存在理由が近代医学によって証明されているわけである。

例えば 近代医学、中医学、ウイグル医学におけるサウダ 黒胆汁質、古代ギリシヤ医学から続く体液説の一つ、冷・乾性でうつ病的傾向があるとされる（の病理的症候群の実験室的、臨床的様相」<sup>き</sup>と題する発表は、この3つの医学体系によって、サウダの症候群を測定しようとする試みである。サウダの異常は糖尿病、高血圧、がん、気管支炎などの疾患に関係し、遺伝的疾患と考えられている。そのため、患者からDNAなどの遺伝子情報を獲得する。その中でアンジオテンシン変換酵素遺伝子の多型

がこれらの疾患と結び付けられる。異常なサウダをウイグル医学の薬でバランスを回復すると、この遺伝子に効果がある。このように分子生物学のメカニズムによって進んだ理解が得られる。

伝統的なウイグル医学の進歩の方向は近代医学によって決定されている。これでは病気の概念、病因学などはすべて近代医学の枠組みで考えられ、ウイグル医学の独特の理論は発展しない。ほとんどの発表がこのような西洋医学との結合を目指す論旨であった。

#### ウイグル医学の個人診療所の事例一

彼はウイグル医学校で教えていた。診療所には看板がある、政府の公認を受けているということである。看板がない医院も多い。以下は聞き取りの要旨である。

まず天、フダー ウイグルではアッラーのことをこのように呼ぶこともある）にお祈りして、薬を与える。マザールにいつて天にお祈りするのはよい。人にのろいをかけるのはだめ、ピリ・ホン ウイグルの伝統的治療師）やバクシ（伝統的治療師）はだめ。イマームアシム（オスラムの聖人）にひざが痛いのを祈るのはよい。からだの病気、腰が痛い、慢性病はマザールやバクシは効果がない。精神的な病はよいかもしれない。

多くの人は西洋医学で治癒できないからウイグル医学に来る。ウイグル医学は外科的手術をしない、薬は自然のものを使うから、長期でも安全である。最初からここに来る人もある。西洋薬の副作用を心配している。自分の息子、娘もウイグル医学の学校に行っている。五代続けて医者である。私は心臓の薬を作った。心筋梗塞、心臓が弱い人、不整脈、などに効果がある。食べ物が変わって心臓の病気が増えてきている。冷たい食べ物、肉などが増えてきている。体がかゆくなったとき牛肉はだめ、ゴシキルダ 中に羊のひき肉を詰めたパン）もだめ、卵もだめ、辛いものもだめ、たまねぎだめ、長ネギだめである。薬を与えるとき食事の注意もする。肉を食べ過ぎると血に脂肪が多くなる。

化学肥料、農薬をつかうとガン、特に婦人のガンが増える。日本では化学肥料を使わないと聞いている。中国では人口が増えているから化学肥料を使わないとやっけない。一九九〇年にウイグル医学が認められた。政府公認の医者はホータンで三人、

他は薬屋である。

娘はトルコで漢方医をしている。ウイグル医学と漢方とは理論が違う。治療方法も違う、六〇%の薬は同じだが使い方が違う。ホータン地区医院に中医学がある。トルコではウイグル医学はわからない。イラン、パキスタン、インドではわかる。この「医学大全」の本はイランで手に入れた。「治療方法」の本はパキスタンで買った、ウルドゥー語（ペキスタンの公用語）で書かれてある。アーユルベータ（インドの伝統的医学）とは少し違う。体質によって治療方法が違う。ウイグル医学ではお酒はだめ、タバコはすこしならよい。

## ウイグル医学の個人診療所の事例二

この人もウイグル医学学校で教えていた、退職して開業、看板を掲げている。以下が聞き取りの要旨である。

ウイグル医学の現状は発展しているが、ニセ医者が増えている。法律で禁止しているが、手が回らない。くすりの作り方も知らないのにバザールで本物に似せて売っている。ウイグル医学で金儲けができる時代になった。父もウイグル医学の医者だった。十二歳から父について勉強した、学校の勉強しながら医学の勉強をした。父から注意されたことは、はじめから終わりまで勉強、とにかく全部勉強といわれた。医者になるについて特別なことは教えられていない。三十歳で独立した。すでに中国の時代になっていた。

ホータンで十六人のよい医者がある、今有名になっている。くすりの説明書をみないとわからない医者も多い。人民公社の時代、ウイグル医学は禁止されていた。迷信と同じようにみられた。西洋医学医院の中で、中医のなかに入れられていた。人民公社の時代はほかの仕事しなければならなくなった。六年間は衣服を作って生活していた。文化大革命のあとでウイグル医学をすることをできた。

八十袋屋（セキサンハルタという、バザールなどの昔ながらのウイグル医薬売り）は言いやすいからそのようにいっているだけで、特別の意味はない。ホータンではセキサンハルタの言葉はない。ウルムチの人が作った、医者ではないという意味もある。今でも田舎のバザールにいる。普通の薬屋はドリハナという。）

西洋医学との関係については、まったく別の医学である。無関係で、西洋医学と結

合してはいけない、それは体質を考えていない。西洋医学の薬は作用が早い、副作用が多い。ウイグル医学は遅いが、安全である。中医学は例えば「熱い」という考え方が違う。生薬でも根を主に使うが、ウイグル医薬は葉を使うことが多い。マザールにいつても病気は治らない、ワクシも効果はない。ウイグル医学はイスラムとも関係ない。イスラム伝来とは違う、二五〇〇年前、ギリシャのヒポクラテスの医学がアラブを経由して伝わった。ウルドゥー語で書かれた医学書があった。ロプ県からきた弟子がいた。十八歳になり、薬の作り方、患者の見方などを勉強している。」

この二人の医者にはウイグル医でも有名である。西洋医学に対しては無関係を強調していた。その薬の強さ、副作用に警戒感がある。がんなどの病気が増えてきていることが、農薬や化学肥料が原因ではないかと疑う人が多い、農薬などが西洋医学の薬に結び付けられて考えられてしまう傾向がある。バクシやマザールに関しても否定的である。イスラムとの関係も医学的には関係ないといっていた。

ウイグル医学は近年、開業する人、薬屋をする人が急激に増えている。利益が出ることはもちろんであるが、ウイグル医学学校を卒業してもすぐ就職できるわけでもなく、小さい薬屋から始める若い人もいる。また、有名な医者に弟子入りする人も増えている。ウイグル人にとって学校が職を得る手段として保障されたものではないことをあらわしている。

あやしげなウイグル医者、薬屋がふえているのもそれが商売として成り立つ時代になったからである。セキサンハルタは農村のバザールの小さな薬売りを指し、街中の薬屋には使われない。このような医療行為が無制限に拡大するのを防ぐため政府は検査や許可制などさまざまな規制をかけてきている。

新疆の現代史において、ウイグル医学は不遇であった。文化大革命の時代には完全に停止させられている。今でも中医学と混同する人は多い。だがこれからはどの方向にいくかはわからないが発展の兆しを見せている。

### ウイグル医学の個人医院の事例三

この医院は二〇年前に建てた、昔の有名な医者の名をとって医院の名をつけた。ウイグル医学の学校は卒業していない、十六歳から見習いをして、ウイグル医学を学んだ。今は五五歳になる。八十袋屋は薬屋だけでなく、調味料もかねている。見習いは、



見て、患者の話を聞くだけである。今は三〇人の見習いがいる、医者としての証明書は学校からもらい、実習をここでしている。自分は独学で試験に合格した。二〇〇〇年以上のウイグル医学の歴史があり、ウイグル医学の指導者はホータン生まれが多い。薬の原料はパキスタン、インド、イランなどから来る。イスラム医学とは違う、五世紀ころから独自に発展してきた。イブンシーナ（ウイグル医学の祖）は有名で、中央アジアの人だが、生まれも明確でない。ウイグル医学は近代でも政治と関係なく発展してきた、近年は発展が早い。漢方と似たところはあがあるが、それぞれの薬は効用が違う。

カン（血）とサプラ（黄胆汁）が多かったら気が短い、がんになりやすい、ベルガン（粘液）が多かったら眠る。それは眼に見える、肺からでる、白いものである。サルダ（黒胆汁）が多かったらあわてる。カンが多かったら血液の病気、脳溢血にかかりやすい。見る、聞く、匂い、触るこの四つで診断する。この病院は五〇のベッドがある。一ヶ月―一年半ほど入院する人もいる。食事は家族が作る。

個人病院にしては規模が大きい、併設して薬局もある、この院長はウイグル医学常用生薬という大部のウイグル語でかかれた図鑑を出版している。ウイグル医学はほとんどの関係書はウイグル語でかかれており、ウイグル医学の学校も、他の大学レベルではほとんど中国語で講義が行われているのに、ウイグル語だけで講義がなされる。ある意味では逆にこれがウイグル医学の広がりを見せている。ホータンでも書店には医学関係の書籍はかなりあるが、中国語で書かれたものはすべて西洋医学か中医学である。）

#### ホータン地区ウイグル病院での患者の事例

① 心臓の病気と高血圧で、カシユガルのユプル県からきた。血圧を下げる薬を飲んでいいる。はじめてきた。西洋医学の薬はすぐ下がるが、やめるとまた上がる、ウイグル医学はそのようなことがない。他の人からこの病院の事を聞いた。種子を売る仕事をしている。今は一ヶ月入院している。大分よくなった。走ると息苦しくなったが、今はそのようなことはない。肉は食べないほうがよいといわれた、肉のスープもだめである、肉は好きだった。

② ホータン市内からきた。三九歳、心臓がわるい。三回目である、西洋医学の病院はいかない、薬の副作用が心配だから。リユーマチの治療中に、胃が悪くなった、

呼吸困難にもなった。教師をしていた、今は退職している。

③ ケリア県からきた、慢性的な心臓病、最初は西洋医学に行った、農業をしている、四二歳、心筋梗塞なら西洋医学のほうがよいといわれた。

④ 頭が痛い、手足がしびれる、それが三ヶ月続いた。中学生、五八日間治療している。頭の痛みは取れたが、足が動かない。ロプ県からきた。西洋医学では精神の病気だから、そちらに行きなさいといわれた、学校で突然手足が硬くなった、お姉さんが大学の入試のときになった。

⑤ チラから着た、十二歳。九歳からしろなまず、塗り薬と飲み薬を使用している。冷たいものやインスタント食品を食べたのがよくなかった。学校の友達にもいる。

⑥ ヤルカンドから来た。西洋医学にも行った、アトピーのようなひどい皮膚炎、今は野菜のスープを食べている、どのような原因かわからない。バクシにも行ってみた、十六歳。

⑦ しろなまず、アルタイから来た。カザフは肉を食べるからからだか熱い、ほかの人から聞いた、アルタイの病院では治療できない、中医学でもよくなる、役所に勤めている。肉は嫌い、この病気の原因は自分でもわからない。

ホータンは医院が多い、一番多い自営業は医院といわれている。新疆でウイグル医学四二病院のうち四医院が製剤室をもっている。この製剤室のくすりはホータン地区でしか使用できない、カシユガルで販売はできない。ウイグル医学をどのように管理するか政府にも方針がなく、混乱している。中医学と同じ範疇に入れている。入院費用は一日十五―二十五元だが、西洋医学の医院は一ヶ月一万元かかる。

脳血管科は、医者五人、看護師　ツストラ、中国語でフシ）五人、各科同じ構成である。医者に比べると看護師の数は少ない。入院患者の日常的な世話、食事などは家族の仕事と考えられている。婦人科は、がんの患者が多い。皮膚科の八〇％はしろなまずの患者。尋常性白斑　俗名はしろなまず、英語ではvitigo、ウイグル語ではアツキサル、アケケサル、白い病気という意味であり、痛くもかゆくもないが、皮膚のメラニン色素が無くなり、白くなる。ウイグルでは見た目が悪いということもあり、ステイグマ」的に嫌われ、ある種の偏見もある。世界中にある病気だが、治療法は確立されていない）の治療に政府も金を出している。ホータンは乾燥、冷たいものをほしがる。ウイグル医学の人体を構成する四つの元素であるカン、バルハム、サプラ、

サウダのなかの、バルハム 粘液質)が多い。これは太っている、ゆっくりしている、よく寝る人の体質である。子供にこの病気が増えてきた。そのような子は水をほしが、羊の肉をたべない、経済的に肉を食べられない。治療は早くて三―六ヶ月かかる、大人は難しい。原因はストレスではない、四歳の子供もなる、女性に多い。昔よりこの病気は増えてきた、田舎の子供が多い。お金がある人は肉を食べ過ぎる、肥満が多くなってきた。経済格差も大きい。健康保険に入っていれば七〇%は政府が払う。企業などに勤めていればよいが、農民などの健康保険はほとんど整備されていない。

西洋医学では効果がない、副作用が心配などという理由で、ウイグル医学に頼るウイグル人が多い。それに対してウイグル医学の医院に漢人が来ることはほとんどない。尋常性白斑は日本でも見られる皮膚病だが、効果的な治療法がない。ウイグル医学はある程度の効果的治療を行っている。ある程度豊かな時代になって、食生活に変化が見られ、糖尿病、心臓病などが増えている。このような慢性病にウイグル医学は効果があるといわれている。

### 西洋医学の歴史と現状

ウイグルでも主流の医療は政府が推進する西洋近代医学である。でもこれは、新疆に住む漢人のための医学であり、ウイグル人の多い農村部では普及はかなり遅れ、医療体制はレベルが低いものがあった。また、医療保険制度も完備されず、貧しい人には手の届かない医療であった。さらに、毛沢東以後、厳しく進められた計画生育（二の子政策）には西洋医学の論理が使われ、従来のウイグル人の生育に関する文化を改変するに至った。

ホータン診療所が一九三八年に設立されている。（この時期の新疆は盛世才 Shengs Shicai の支配下であり、比較的、安定した時代であった。ホータン区にも警察局、教育局など各種の行政機関が設立された。）医療の人員は四名である。それが中華人民共和国になって、ホータン地区人民医院に変わった。一九九二年で医療技術人員は三五〇人で、ベッド数四〇〇、中医学も含めた総合医院である。ほとんどの医師が漢人である。各県に人民医院があり、各郷には衛生院（地区全体で八七ヶ所）がある。

また、ホータン地区衛生学校（中級学校）が一九五八年に設立され、一九六〇年に停止され、一九七四年に再度、開校された。しかし、十七人の教師は大部分が正式でなかった。一九八七年には専業の教師が三四人になって、学生数七〇〇人になった。

この学校は、医士（医師とはちがう二級の医者）、看護士、助産婦、薬剤師、ウイグル医士、公衛医士、検査士などを養成する。高卒と中卒の二種類の受験生がいる。落ちる人はほとんどいない、中卒は看護士など、高卒は医者で、すべて四年間である。卒業したら村の医者になる。医科大学は町、県の医院へ就職する。ウイグル医学もある。

中華民国の時代の一九三八年にホータンの隣のロプ県に、西医療病所が設立という記録がある。この地域に西洋医学が普及し始めたのはこのころだと推測される。この時代に、今までの伝統医学、いわゆる中医学、ウイグル医学も否定され近代的な西洋医学だけで医療制度を作ろうとしたが、実情に合わず、伝統的な医学も存続した。

現在でも圧倒的多数の医院は西洋医学である。社会主義の時代は、医院はすべて政府系であり、地方政府が運営する医院がすべて医療を担当していた。開放政策が進んで、医療の分野でも民間医院が認められ、ホータンでも上海などの資本が全国に展開する系列組織の医院が作られている。そのひとつの総合医院を紹介する。まだそれほど知られていないので患者は少ないが、特徴として、医者はウイグル語を話せない漢人が多いため、通訳を置いていることである。

それがホータンの民間医院であり、全国的な系列を持つ民間の病院である。二〇〇六年八月設立、産科、婦人科、口腔科（歯科を含む、歯科美容もあり）、男科（前立腺、性的不能など）、胃腸科、五官科（耳鼻咽喉科と眼科など）、外科（美容整形を含む）などが開かれている。敷地面積六〇〇〇平方メートル、ホータンの中心街に位置している。

### 西洋医学による計画生育の推進—ウイグル文化への干渉

政府の衛生機関は、当然ながら西洋医学を基盤としている。それは自治区から県や郷レベルまで存在し、政府の政策沿った保健活動や調査を行っている。幾多の調査があるが、その中で婦人の子宮の病気がホータンやカシュガルなど南新疆に多いという調査結果がある。<sup>9</sup> 一九八一年から一九八二年にかけて、その病気の予防のため、調査がされ、その原因として次のような指摘がなされた。一番には早婚、早い年齢での出産、多産である。二番目には、重たいタガル（袋）を肩に背負い、長時間労働する。三、しゃがんで仕事をする習慣、産後早くから労働を始める。四、新しい助産の仕方が普及していない、しゃがんだ姿勢で分娩を行っている人が多い（この当時まではいわゆる座産がウイグルの出産方法であった。いまでは産婆さんがするより、ほとんど

の人は医院で出産する。五、栄養が不足している。

この結果を受けて、遅い年齢での出産、出産の間隔をあける、生む子供の数を少なくする、ことが提唱された。さらに座産をやめて、新しい方法を普及させることも決められた。

また別の調査でも同じようなことが言われている。10) 一九八五年、ウルムチ市とカシユガル市において、約四万三〇〇〇人の女性を対象に子宮のがんの調査が行われた。その結果、ウルムチでは、初婚年齢が十五歳以下では罹病率が六〇四（二〇万人に対して）、二二歳以上では四であった。カシユガルでは十五歳以下では四三三、二二歳以上ではゼロであった。しかし、この調査結果を実数でみると、ウルムチで十五歳以下の罹病者は四人であり、二二歳以上は一人である。全体としても、十九人しかない。前記の初産年齢との相関関係の調査でも同じことが言える。カシユガルで初産年齢二〇歳以下の人では罹病者は六人、二〇歳以上は一人である。どちらにしても率であらわすと、かなりの差が出るが、実数が少なすぎる。この調査結果でも、低年齢の結婚、出産はよくない。少なくとも二〇歳以上で結婚する方がこの病気になるににくいことが言われている。つまり、晩婚、遅い年齢での出産が提唱されている。

早婚そして早く多くの子供を生むことは、ウイグル人の習慣である。座産もそうである。このようなウイグル人の習慣が、西洋医学の言説を使って否定され、変更されてしまう。早産や多産がこのような女性特有の病気になる確率を上げることはあるかもしれないが、医学的に証明されたことではない。中国政府は一九七九年に計画生育政策を始める。このような状況はこの後、一九八八年から南新疆でも実施された計画生育（一人子政策）に当然続き、政策的に確立されることになる。ホータンの隣のロプ県では一九八八年にロプ県計画生育委員会が成立し、一九九四年では四万四九二二人の相当する女性のうち、計画生育 少数民族の農民は三人まで許可される）を実行している人は一万八五三四人で、四七・八七％である。県の出生率も一九八一年二五人（大口二〇〇〇人当り）から一九九四年二一人に下がっている。一九七三年ロプ県衛生防疫婦女子保健所が設立、これから婦女子保健所が独立したのが一九九〇年である。

中国政府の考え方は次のようなものである。晩婚、遅い出産、少産と健康な出産、さらに男女の子供に差をつけない考え方、これらが幸福で、完全で、調和のとれた小さな家族を作る。さらにこれらの考え方は近代的で、科学的で、文明的な生活様式を

形成し、時代の趨勢になってきている。実際には早婚する女性の数は減ってきている。家族のサイズも小さくなり、核家族が現代中国の主要な形となってきている。医者などの講演やアドバイスで人々は人口、出産、避妊、計画出産、母性、子供の養育などの科学的知識を得る。

計画生育とはバイオパワーの典型的なものである。病院、母子ケアセンターが中国全土に張り巡らされ、婦人の病気の調査、予防、治療、結婚前の遺伝的な病気の相談、産前産後のヘルスケア、新しい出産方法、子供のヘルスケア、避妊の実施などがなされてきた。人口流産もここで行われた。

### ホータンのブザク郷の医院

地方政府が運営している。漢人の若い看護師に聞く。

ホータンで生まれ、ホータン衛生専門学校卒業 中等専門学校、日本の短期大学に相当する。この卒業生は医士とよばれる、ほかに検査技師、看護師も養成している。中国全土ではこの学校の比率が大きかったが、次第に高等専門学校以上の医者養成学校の比率が大きくなっている。(一九九二年に赴任。医者も大卒はいない。郷レベルの医院では大卒の医者はほとんどいない)。

ここは七〇年代、人民公社の時代に作られた。風邪の治療費は二〇元もしくははにわとり一羽。患者は多いとき一日十五人。外科的な手術はしない。保健婦は郷で二〇人いる。病气予防やワクチン接種などをしている。小児麻痺、破傷風、百日咳、甲状腺肥大 ヨードが少ない、中年以上に多い)などの病气が多い。そのほか、この地域は肺病、風邪がおおい。家族計画 (計画生育) について医院は関係していない。郷政府に委員会がある。子供の数がオーバーした人がいると、委員会と医院で証明書を出して処置する。一年間で二例あった。

ウイグル語はよくわからないことがある。(このような公立医院には漢人が多い。言葉が通じないという理由で、住民の大多数を占めるウイグル人には敬遠される。五人の漢人が勤めている、わたしよりウイグル語はできる。すべて自然に覚える。三年勤めたら大学いける資格ができる。五年は転勤できない。わたしは北京、上海などの医科大学に行きたい。でも英語の試験があるのでホータンの専門学校出たくらいでは難しい。ホータン市内の医院に勤めるには新疆医科大学を卒業していない

と無理である。給料の三割を医院の運営費に出す。利益が上がったら配分があるが、医院は利益が出ていない。これは二〇〇〇年の聞き取りであり、その当時、民間医院はほとんどない。現在はウイグル医学でも、西洋医学でも民間の医院がかなり設立されて、利益をだしている。昔ながらの政府が設立した医院は財政的な困難に直面している。

医院の会計係の話では郷の医院には患者が来ない。ベッド代、レントゲン代など高い。十五くらいある郷の個人の医院は薬だけ与えるから、安い。医者も郷の医院だと月収一〇〇〇元くらいだが、個人でやると三五〇〇元になる。医者も個人で開業したがる。ここからも二人独立した。医院の会計も月に一〇日しか仕事がないので別の工場の仕事もしている。

#### 新疆医科大学卒の西洋医学の医者の話

ウイグル医学はわからない、西洋医学で大体治療できる、内科では西洋医学で治せないのがある、地区医院は値段が高い、西洋医学の医者はホータンで約六〇〇人いる。中医学は地区医院だけにある。地区医院は漢人が多く、言葉があまり通じない。わたしは父が漢人、母がウイグル人である。自分で薬を買って直す人が多い、最近、医院に来る人も増えた。いまは民間の医院が増えている。上階は入院室、心筋梗塞、ロブ県から、よくなっている、入院三日目、ウイグル医学は知らない。五六歳。一〇〇〇元とか、二〇〇〇元前金を払って入院する。民間の医院には保険はない、でも民間が安い。

#### 西洋医学の新しい民間医院

患者がまだ少ない、この医院にはウイグル人のために通訳がいる、西洋医学は漢人が多い、だんだんとウイグル人の医者になるとよくなる。地区医院を退職した医者が多い、腎臓結石の治療を超音波破壊で行う。二〇〇〇元、手術より簡単、上海の資本家を作った全国にあるチェーン店の病院、かぜで入院しても六〇〇元と高い、病院はもうかる。

ホータンのように市内だけで十八万の人口の小都市に、このように民間総合医院を建てて採算が取れるのか疑問だったが、ウルムチ市の西洋医学の大学教授が次のように説明してくれた。

現在、中国では医学部を卒業できても医師として就職できるのは二〇%である。中国ではほとんどの総合医院が政府系である。政府は予算がないことを理由に医師の定員を増やさない。私立医院は増えているが、政府系の医院に二〇年以上勤めた人でないと開業できないから難しい。今は医療ミスで裁判に訴える人が増えている。民間だと対応が大変だが、政府系だとある程度守ってもらえる。ウイグル人は医療ミスがあっても、運命か神の意思だと考えて、医師を責めることはしない。ホータンのような小都市で私立医院が建てられるのは、市内の人口は少ないが、ホータン地区では一七〇万の人口がありそのほとんどが農民である。かれらの健康保険は整備が遅れ、保険がないに等しい状態である。政府系の公立医院に行くと保険は使えるが、医療費は高い。それよりはむしろ保険は使えないが安価な民間の医院に行く人が多い。

### 保険医療制度

人口の大部分を占める農民に関することである。一九五八年頃、農民合作医療が始まった。人民公社の一人で一元ほど拠出して、治療費を保障してもらう制度である。ロブ県では一九六五年には普及して、大隊（公社）には診療所があり、二〜三名の赤脚医師（いわゆる裸足の医者である、六ヶ月程度の公衆衛生教育を受けただけである）が派遣され、女性の医師が出産を担当した。しかし、赤脚医師の教育程度は小学卒業であり、医療設備などのレベルはかなり低いものであった。この農村合作医療はやはり財政が破綻して一九九二年に停止された。しかし、また復活している。

また、これまで行われていた医療制度は中国語で「吃大鍋飯」仕事の出來や貢献度に関係なく、待遇や報酬が一律であること）であり、すぐ財政が破綻することは目に見えていた。一九八四年、公費医療制度は西洋医学、中医学は処方量が一回につき三元と決められ、八〇%が補助される。二二二一人がそれを受けて、県全体の額は三万円、一人当たりわずか約二〇元である。しかも、総人口が十九万人だから、受けた人はその一%にすぎない。一九九四年になると一人あたり二〇〇元になったが、公費補助を受けた人は二%ほどである。

農民は都市に比べると、相対的に貧困の状態に置かれている。農産物の価格、何を生産するかが自由に決定できない。その根底には土地によって生計を立てている農民



でありながら、その土地の所有権を持っていないという問題がある。

医療に関して言えば、改革開放とともに、医療費が健康保険というかたちで、自己負担を求められるようになった。社会主義の時代の互助共済医療制度が、財政的にも立ち行かなくなり、公的保障とともに自己責任の原則でもって保険制度が作られていった。農村では「農民合作医療制度」が二〇〇三年に設立され、農民が一人当たり年間一〇元を納め、地方政府も二〇元の補助金を拠出して運用するものである。ただし、この医療保険は地方政府が設立したような公立病院でないと適用できない。改革開放政策と共に、医療財政を考えるべき時代になり、政府は公立病院にお金をつぎ込むより、民間病院に医療の一端を担わせるようになった。このホータンでも民間の病院が安く、治療も効果的、また同じウイグル人の医者が多く、言葉が通じることもあって、そちらに行く人が多くなっている。

### ウイグル医学の将来

医療はウイグル人にとってかつてないほど重要になっている。ウイグル医学は制度的に承認され、西洋医学にできない医療を担う代替医学システムとして発展してきている。民間のウイグル病院も増大している。それは、ウイグル人にとっての医療でもあり、数少ない就職先でもある。

改革開放にともなって、西洋医学も民間病院が増え、経済的にも拡大しているが、その恩恵を、ウイグル人がどれだけ受けているかは疑問である。

医療制度に関して、社会主義の時代と違って、保険制度は小規模ながら出来つつあるが、ほとんどは自己負担である。入院するにしても、多額の前金を要求される。ホータンでも、豪華な民間西洋医学病院が建設されているが、多くの農民がどれだけそのような病院にいけるかは問題である。

医療への関心の増大は、改革開放後の急激な社会変化がもたらす不安感と無関係ではない。経済成長に取り残され、経済格差が拡大する時代に、ウイグル人にとって医療の問題は将来の民族の問題と深くかかわっている。さらに、計画生育に限らず、エイズなどの新しい保健の問題などに関しても、本章で述べたようなウイグル民族がどのように西洋医学とかかわっていくかは、彼らのアイデンティティに関係する。ただ、医療的に優れているから、効果があるからだけで、西洋医学を無自覚的に受け入れるのでは民族の存在にもかかわる。ウイグル医学は彼らのアイデンティティの核と

なるとともに、その民族の枠を超えた発展が望まれる。世界的にも西洋近代医学への批判と、代替医療への関心の増大は、その方向で医療を考える時期に来ている。

ウイグル医学がウイグル民族のアイデンティティとなり、かれらの医療の重要な部分を占めるかどうか。いまだに不確定な要素が多くある。しかし、象徴的に実際的にウイグル文化・社会にとってウイグル医学は拡大しつつある。

ウイグルの伝統的な生薬の長い伝統は新疆で医学教育の重要な部分になっている。それは民族の誇りの源泉でもある。漢人の中医学に対する国家のプライドと制度的教育を見習って、ウイグル人は貴重な自らの科学として、ウイグル医学の伝統的な医療行為を自治区政府も社会的にも正式な医療にした。(社)

ウイグル医学はその基本的な理論の部分は、古代のギリシャ医学、ユナニ医学（ネスラム医学）と同じであるが、近年ではウイグル独自の医学であるという意識が強くなってきている。歴史的にはイスラム起源から離れる傾向がある。確かに、臨床の面では生薬の組み合わせ、調合などウイグル独自のものも見られる。

ウイグル医学専門学校が設立されたところから、政府によって制度的医療として認められ、また「科学的」証明の裏づけが盛んになったところから、イスラム起源が言われなくなった。

ウイグル医学の公式の本である中国医学百科全書(社)には次のように書かれてある。ウイグルの古代の祖先は、医薬学の基本理論を、すでに紀元前四世紀の前に形成している。全体の宇宙の基礎は火、空気、水、土の四大要素の対立から構成されている。人の生命は自然界の中でこれらの四大物質の組合せから形成される。この唯物的な自然観は、後に古代ギリシャのヒポクラテスに受け入れられ、彼らの全体の医薬学の観点の基礎になった。

ヒポクラテスは青年時代、かつて黒海北岸のサカ人の中で生活した。彼の全体の医薬学の観点の基礎を打ち立てるためにはサカ人の医薬学が有益だった。そのため、ペリクレスの時代で、サカ医師と祈禱師がギリシャではとても尊敬された。

古代ギリシャの医学の著作が訳されてアラビア語になった後に、四大要素の学説は正式にこの後でアラブ、中央アジアの医薬学の基礎理論になる。

ウイグルの医薬学は二五〇〇年余りの長くて苦難に満ちた蓄積を経て、西域の東方と西方のきずなの地理的優位を通して、東方と西方の医薬学の発展のために重大な貢献をした。同時に漢の医薬学(中医薬学)とギリシャーアラブの医薬学の精華をも吸収

して、特色の医薬学の理論の体系を持つ。

最古のウイグル医学者として、ハジバイ Hazibay があげられている。現在でも、ウイグルの生薬を成分とした養毛剤、殺菌剤などのブランドとしてこの人の名前が使われているほど有名である。彼は古代の有名なタリムの医薬学の家に生まれた。紀元前の四五〇〜三三〇年、西域のウテン(今新疆ホータン)の人である。ハジバイは、豊富な臨床経験があつて、特に薬材を重視して、実践的である。八〇歳の時それによってカロシユティ文で、植物、鉱物と動物種類の三二二種類の薬材を記している。『ハジバイ薬書』と命名されている。

彼の後、幾多のウイグル医学者が現在に至るまで名前を挙げられている。かれらは隣接する、アラブ、ペルシャ、インド、チベットそして中国と頻繁な交流を行っている。この地域の伝統医学が類似しているのはそのせいであろう。また、交流の故にそれぞれの医学の発展があつたのである。

現在でもウイグル医学は一般的にはユナニ医学の中に分類される。それは中近東、イラン、パキスタン、バングラデシュなどのイスラム教国、に広がるものである。このような普遍的な流れの中に位置づけるより、その独自性を強調する考えが強い。

医療はウイグル人にとってかかつてないほど重要になっている。ウイグル医学は制度的に承認され、西洋医学にできない医療を担う代替医学システムとして発展してきている。民間のウイグル医院も増大している。それは、ウイグル人にとっての医療でもあり、数少ない就職先でもある。

改革開放にもなつて、西洋医学も民間医院が増え、経済的にも拡大しているが、その恩恵を、ウイグル人がどれだけ受けているかは疑問である。

医療制度に関して、社会主義の時代と違って、保険制度は小規模ながら出来つつあるが、ほとんどは自己負担である。入院するにしても、多額の前金を要求される。ホータンでも、豪華な民間の西洋医学医院が建設されているが、多くの農民がどれだけそのような医院にいけるかは問題である。

医療への関心の増大は、改革開放後の急激な社会変化がもたらす不安感と無関係ではない。経済成長に取り残され、経済格差が拡大する時代に、ウイグル人にとって医療の問題は将来の民族の問題と深くかかわっている。ウイグル医学は彼らのアイデンティティの核となるとともに、その民族の枠を超えた発展が望まれる。漢民族にとつての中医学のような位置を占めることである。世界的にも西洋近代医学への批判と、

代替医療への関心の増大は、その方向で医療を考える時期に来ている。

【注】

- ① この論文は国際ワークショップ、新疆・中央アジアにおけるウイグル人の社会・文化と民族的アイデンティティ」東京、二〇〇六年十一月二五日・二六日）における英文での発表が基になっている。
- ② Foucault, M.(1991) 'Governmentality', trans. Rosi Braidotti and revised by Colin Gordon, in Graham Burchell, Colin Gordon and Peter Miller (eds) *The Foucault Effect: Studies in Governmentality*, pp. 87-104. Chicago, IL: University of Chicago Press, 1991.
- ③ J.Dautcher. 2004 *Public Health and Social Pathologies in Xinjiang*, in Frederick Starr (ed.) *Xinjiang, New York, M.E.Share*, pp.276-277
- ④ ホータン地区政府、二〇〇五、ホータン年鑑、人民出版社、二〇二頁。中文)
- ⑤ ロプ県誌編纂委員会、二〇〇一、ロプ県誌、新疆美術摄影出版社、六六七―六七八頁。中文)
- ⑥ ゼブ県誌編纂委員会、一九九二、ゼブ県誌、新疆大学出版社、四二―四一五頁。中文)
- ⑦ ホータン風物編集委員会、一九九四、ホータン風物、新疆美術摄影出版社、一七八―一八一頁。中文)
- ⑧ Dubrovin,D.A. and Hupur H. 2003 *The laboratory and clinical aspects of pathological syndrome "Savda" in contemporary,traditional Chinese and Uighur medicine. The paper presented at 2003 International Academic Conference of Uighur Medicine.*
- ⑨ 新疆ウイグル自治区地方誌編纂委員会、一九八六、新疆年鑑一九八六、新疆人民出版社、五六二―五六四頁。中文)
- ⑩ 同右書、五六四頁。
- ⑪ Nathan Light, *The Greenwood encyclopedia of world folklore and folklife*, William M. Clements, ed. Westport, Conn. Greenwood Press, 2006. Vol. 2, pp. 335-348. [http://www.wilsoncenter.org/topics/docs/xinjiang\\_dec08.pdf](http://www.wilsoncenter.org/topics/docs/xinjiang_dec08.pdf)
- ⑫ 中国医学百科全书編集委員会、二〇〇五、中国医学百科全书・ウイグル医学、

上海科学技术出版社、一七頁。